

ワシントン情報、裏 Version
2005年1月28日
竹中 正治
「なぜ日本人はプレゼン下手なのか」

【雄弁家が多い米国の政治家、企業トップ】

アメリカの政治家、企業の CEO などのスピーチを聞く度に思うが、みなさん演説が上手い。日本の政治家や大企業のトップの平均的なレベルとは段違いに上手い。勿論米国でも日本でも個人差はある。しかしアメリカでは地位の高い人ほど演説が上手い人が多い。日本では見られない傾向だ。大勢の人を前に話をして自説を説得し、聴衆を魅了する能力における日米の水準格差の理由は何だろうか？

最もステレオタイプな説明は次のようなものだろう。「日本社会の政治や企業組織は権威主義的、閉鎖的であり、会議での意思決定は事前の『根回し』で予め準備される。従って、意思決定のプロセスにおけるオープンなディベートやプレゼンテーションにあまり価値が置かれない。一方、米国はディベートや様々なプレゼンテーションを通じて政治や企業組織の意思決定が形成されるので、プレゼン能力、ディベート能力が重要視される。そのため米人はプレゼン能力を磨き、またその能力が高い人がリーダーとなる確率が高くなるのだ。」しかし多少でも米国に身を置いて観察すれば判ることだが、米国の政治過程も見た目ほどオープンではないし、企業統治では CEO の独裁的な権限の暴走が問題になって来た。

それでも米国の文化的な規範・価値観が演説やディベートに日本よりも遥かに高い価値を置いていることは間違いない。ではなぜそうした日米の相違が生まれたのか？ それを問うと社会の歴史形成過程全般に説明は拡散し、具体的に原因を特定することが困難な領域に迷い込んでしまいそうである。しかし私は実は判り易い事実の中に、日本人のプレゼン下手の原因があると思う。

【日本の子供の読み書き訓練は大変】

娘(小学4年)の小学校クラスメイトのアメリカ人宅に招かれた時のことである。話題が日米の小学校での国語教育に及んだ。米国の子供と比べると、日本の子供達は、表音文字としてひらがなとカタカナを学び、表訓文字として中国起源の漢字を学ぶ。更に小学校高学年からアルファベットでローマ字を学び、中学1年から英語を学ぶわけで、米国の小学生に比べると読み書きに要する学習量は大変に多い、と私は語った。米人の奥さんが、漢字はどのくらいの数があるのか、100か200かと問うので、一般に使用されている数で1000とか2000だと言ったら、目をまるくされた。更にアルファベット24文字に対して、ひらがなは51音で、そのままだとキーボードに載り切らない。だから私達日本人はワープロソフトを使用する時、アルファベットのPCのキーボードを叩きながら、PC画面上にひらがな、カタカナ、漢字の3種の文字で構成された完全な日本語文章を作成するのだと話したら、「信じられない」という反応だった。

【文字体系の複雑さの度合いが生み出した相違】

自分でアメリカ人に日本の国語教育の説明をしながら、はっと気がついた。実際日本人は子供時代に「書く」ことを学ぶためにアメリカ人とは比較にならないほどの学習労力を費やしているのだ。しかも算数にもアメリカ人以上の訓練を費やす。だから日本の小学生で算数の計算能力が平均的な子供でも、米国の小学校では超トップ水準だ。しかし学習に費やせる時間には限りがあるので、それだけ日本の子供が書く訓練に多くの労力を費やせば、必然的に犠牲になる訓練が出てくる。それが口頭プレゼン能力、大勢の前で話す能力の訓練である。

自分の子供時分の記憶を辿ると、幼稚園から小学校初期の頃までは、「みんなの前でお話をしましょう」というレッスンがあった。ところが小学校の半ば頃からそうした「お話レッスン」は乏しくなり、その後ほとんど復活することはない。読み書き(それに算数)に必要とされる訓練時間が多くなり、更に社会や理科の知識習得が増え始めると、口頭プレゼンの訓練時間は切り詰められ、ほとんどゼロになってしまう。大学受験でも口頭試問などはないから、中学、高校での受験勉強でも口頭プレゼン訓練はほとんど復活しない¹。

一方米国の小学校では、「みんなの前でお話しよう」のレッスンは継続し、かなりの時間が費やされている。今年10歳になる娘が通う米国の公立小学校でも、かなり多くのレッスン時間が口頭プレゼン訓練に費やされている。例えば“Book Report” “News Report”と呼ばれ、読んだ本や新聞ニュースについてレポートする作業がある。日本なら「読書感想文」を書いておしまいたろうが、“Book Report”ではレポートを書き、その後クラス生徒の前で口頭プレゼンをする。そのプレゼン内容が幾つもの評価ポイントから評点される。米国に来てようやく1年半の娘は当然英語のハンディがあり、なかなか口頭プレゼン評点で“A”が取れなかった。女房が指導し、繰り返し自宅でリハーサルを重ね、とうとう最近“A”がとれたと喜んでいた。

米国における口頭プレゼン能力の訓練は、初等中等教育のみではない。日本人が米国の大学、大学院に留学すると、口頭プレゼンやディベートの時間が多いことに驚き、日本の大学教育との大きな相違を経験することは、今日では良く知られた事実である。

訓練に費やす学習労力にこれだけの日米格差があれば、日本人の相対的な口頭プレゼン下手も無理からぬことである。そして米国の小学校がこれだけ口頭プレゼン・レッスンに時間が割けられること的前提条件として、文字を書く訓練に要する時間が日本に比べて相対的に少ないからだと思ふ。

【弁論文化と文章文化】

勿論、学校のカリキュラム構成にはその社会の文化的な価値観が反映されるから、米国が口頭プレゼンを重視する文化である故に、教育カリキュラムでもプレゼン訓練に多くの時間が割り当てられるという逆の方向の説明も可能である。しかしアルファベットという比較的簡単な文字体系を持ったことが、口頭プレゼン訓練により多くの時間を費やすことを可能にし、この2つの文化要素は相補的に強化されて来たのではなかろうか。反対に日本では複雑な文字体系を持ったことと文章プレゼンを重視する文化要素が相補的、相互強化的に発展してきたと言えないだろうか。

複雑な文字体系は日本だけではない。漢字は1949年革命後の中国では大幅に簡略化されたものが使用されているが、それ以前は数も多く、表記も現代に比べると遥かに複雑だった。浅田次郎のベストセラー「蒼穹の昴」には清朝末期の科挙試験の様子が再現されていて面白い。科挙試験で要求されるのは様々な古典書物に精通し、文章の徹底した形式美の要件を満たしながら格調の高い文章を書くことである。

真言密教の祖で日本古代世界の天才と言われた空海が、遣唐使の一行に加わり唐に渡った時、嵐で船が流され、航路を大きくそれて中国南部に漂着した。地元の官吏が漂着した一行を検分しに来たが、遣唐使を迎えたことのない地元の官吏は日本国の使節として認知してくれない。そこで既に日本で中国の学問を習得していた博学英才の空海は、筆を取り、事情説明の文章を官吏に

¹ 私が学んだ都立戸山高校では、教師が一方的に教えるのみではなく、生徒が自習して発表する時間が幾つもの教科で当時取り入れられていた。しかしプレゼンの技術的な指導を受けた記憶はほとんどない。しかし私の娘が通学したお茶大附属小学校では、クラスメイト全員の前でプレゼンする訓練が比較的沢山盛り込まれていた。受験勉強の圧力が低年齢化する一方で、こうした教育方法の導入も増えているらしい。

献上する。官吏は完璧な中国語で書かれた空海の文章を読み、その並外れた格調の高さに驚愕し、空海一行が正式な遣唐使であると認めたとする逸話がある。格調高く、しかも美しく書かれた文章は、それ自体芸術的な価値さえ認められるようになったことは、中国、日本に共通のことであるが、西洋にはそうした発展はなかった。

このように中国も口頭プレゼンよりも文章プレゼンを重視した文化的傾向が濃厚だった。文字文化が発展するその初期条件において、たまたま相対的に複雑な文字体系を生み出した結果、その複雑な文字体系を自在に駆使できることが文化的価値として尊重、重要視されるようになった。こうして複雑な文字体系と文章プレゼン重視の2つの文化的な要素は相補的、相互強化的に発展して来たと言えるのではないか。1949年の革命後はそうした傾向は反対に振れる。複雑な文字体系は知識を知識階級が独占する傾向を生み出すと考えられたからであろう。漢字の徹底的な簡略化が進められた。

一方、アルファベットを文字体系とした西洋では、単語を憶える、文法を習得するという言語共通の訓練を積みさえすれば、文章作成自体は相対的に容易である。容易なものでは差別化し難い。知識人を目指す中国や日本の子弟が文章作成訓練により多くの時間を費やし、複雑な文字体系を駆使した文章文化を発展させた一方で、西洋の子弟は別のプレゼン技術の訓練に時間を費やした。その結果生み出されたのが弁論文化である。演説やディベートの巧みさ、格調の高さに価値がおかれた。

古代ギリシア時代のソフィストらの弁論術、ソクラテスの問答法は、口頭プレゼン、ディベート重視の文化的原点である。弁論重視はローマ時代にも継承・発展され、弁論に卓越することは政治家として重要な要素だった。その最高峰がローマ共和制末期の大弁論家であり、政治家であるキケロである。文章が重視されなかったとは言わないが、文章が書けるだけでは真の知識人、リーダーとしては十分でなく、公衆を説得、魅了するような雄弁さが高く評価されたのだ。

勿論、弁論文化が発展するためには、政治や社会生活において自由な言論が許容されることが前提となる。従ってアルファベットの文字体系からストレートに弁論文化が生まれるわけではない。古代ギリシアやローマの共和政治は弁論文化の制度的な土壌となった。ローマも帝政に移行し、皇帝権力が絶対視される時代には、弁論家は活躍の場を失ったはずである。ローマカトリックの宗教的な権威が政治・社会を覆い、それ以外の世界観が一切否定された欧州中世も弁論文化にとっては不遇の時代であったことだろう。近現代における米国の弁論文化は、ギリシャ・ローマ時代に起源する文化的要素が、米国の独立戦争を経て大統領制と議会制民主主義が発展した土壌の上で、再生されたもの言えるだろう。

【ワープロとインターネットがもたらす文化的な変容】

私は「漢字の使用は非効率だから廃止して、その分弁論訓練をすべきだ」などと言うつもりは毛頭ない。しかし漢字廃止論が戦後の一時期日本で真面目になされたことがあったと言う。漢字は手で書くことを前提にすると、憶えるのにも、書くのにも時間がかかる。

小学校時代に漢字を憶える練習で、同じ漢字を5回ずつ書く宿題は日本人なら誰でもやったものだが、うんざりする作業だった。

しかし漢字は文章を読む場合には極めて効率的に意味を伝達する表記法である。「速読」の達人に漢字とひらがなで書かれた普通の日本文と、ひらがなだけで書かれた文章を「速読」してもらう実験をTVで見たことがある。達人の速読はひらがなだけで書かれた文章に対しては全くのお手あげだった。漢字には意味を伝達する高い効率性があるのだ。

1980年代半ば以降、文章を書く作業に画期的な技術革新がもたらされた。言うまでもなく、ワープロソフトの普及である。編集、訂正、追記が自由自在のワープロはなんと便利なことか。また90年代のインターネットのおかげで書いた文章が即座に発信できる。これはどう考えてもグーテンベルグの活版印刷に匹敵する技術革新だろう。

私は過去10数年ワープロソフトを使わずにまとまった文章をほとんど書いたことがない。そのおかげで漢字がだんだん書けなくなってしまった。読めるけど書けない。書き順もかなりいい加減である。しかし一字一字漢字を書く煩雑な作業から解放されたおかげで、文章を書く作業は飛躍的に効率化された。ワープロソフトの普及で「漢字文化」が廃れると危惧する声もあるようだが、この技術的な変革は不可逆的であろう。同時に日本の「文章文化」にも間違いなく大きな変革をもたらしている。一昔前までは活字になって印刷された文章自体に一定の権威が認められた。活字になるためには手間とコストがかかったからだ。しかし現在はワープロとインターネットのおかげで、活字化された文章の作成と発信が一気に大衆化し、世の中にあふれ出るようになった。飛び交うEメール通信、急増するブログ(Weblog)、その変化の帰趨がどこに向かっているのかについては未だ考えが熟さないので、またの機会に採り上げたい。

ともかく、書く作業が効率化された結果、社会全体で生じた余裕時間は別の作業に費やすことができる。その余裕時間を何に使うか？ もっと書きますか？ 弁論を磨きますか？それとも遊んじやいましょうか？

以上